

中野氏よりの通報

我輩が東京へ歸着すると間もなく、新嘉坡の中野光三君から鐵膽の死亡を報する一書が毎日新聞社へ到着した。其の手紙の中に曰く

阿川氏は其の死する前に、屢々貴社の石川氏の事を語られ申候。石川氏は目下御渡清中と存じ、貴社に御通知申上候

鐵膽は七月の下旬、病氣の少しく輕快となれるに乘じ、勇氣を奮ふて汽船に乘じ其の望む所の新嘉坡迄來り、中野病院に其の病軀を投じたが、中野君は之を一診して病氣の到底治療する能はざるを知り、鐵膽に其の宣告をなして、覺悟をさせ、鐵膽は七月三十日を以て永眠したので有る

而して此の通知と同時に、天南新報記者西村司馬君の吊辭をも封入して送ッて來た。其文左の如し

阿川太良君逝く矣。君は長州萩に生る。品川先生の高足にして、資性沈毅、學殖淵博、人目するに卓犖奇偉の士を以てす。明治二十六年支那に遊び、鴻爪北京に印し、南京に及び、足跡殆ど禹域に遍し。其見聞する所、其抱持する所言となり辭となり。經

緯や所見や、頗る見るべし。讀者尙記憶するなるべし。當時の庚寅新誌上、光彩燦爛として、讀者に清國の新智識を附與し、日本に斬新の持論を貢獻せし事を、爾來暹羅に遊び、苦心慘憺經營拮据、圖南商會なる者を興こし、商業に従事する事七年、其間日暹貿易に政治に君が所見は施行され、君が手腕は揮灑されたり。或は深く瘴霧を侵かして、暹羅の内地を巡遊探檢し、或は其蒲柳の質を以て尙大象に騎し、馬來半島を週遊視察せし如き、徒らに自家の商略に資せしが爲めならずして、盡く是れ君が國家に盡す一片の衷情に出でたるもの、其巡遊記の如き、又當時の毎日新聞に刊行したる所なり。君か日暹の關係をして親密ならしめたるの功甚多し。とすべきなり。人多く云ふ、南洋に於て志士にして商機を兼ねるの人、獨り阿川先生あるのみと。客暹羅より來る者曰く、暹羅に於て日人の牛耳を把る者、獨り先生のみにして、數年以來人の暹羅に遊びて、先生の恩顧に倚らざる者、殆稀なり。而して形以上に形以下に、先生か日暹の事業に盡瘁されたる功績は、弘く事物に顯はれ、深く人心に刻まれ、決して亡ふべからざるものありと。眞に香港以南唯一の奇傑の士なりし也。而して今茲七月病に罹り、星坡に轉地療養中、病勢頓に革まり、遂に起たざるに至る。君の知己醫學得業士中野光三君は、星坡に開業せるの士、君か

遺骨を収めて、スラングーンの日本共同墓地に葬むる、會葬するもの百數十人、馬車數十輛、皆是れ君が名を聞き、君が徳を慕ふの人なり、吁三千里外の客地、殊に君が没交渉の星坡に於て、此の如き盛葬あるに因りても、君が平素に於ける名望の南洋に高かりしを見るべきなり、嗚呼今や東洋の風雲、北京を捲く、正に是れ國士の國に盡すの時、君の如き支那の事情に通じ、忠躬を忘るゝの士にして尙在らば、這次事變に盡瘁する處亦幾許なりし乎、時艱にして偉人を想ふ、茲に於てか吾人が君を悼むの情益痛切に堪ざるなり

我輩は此の報知を得て、痛恨の情禁する能はず、終に毎日新聞の一ページを割て、彼の事を記し、此の西村君の吊辭をも文中に挟んで公けにした

鐵膽の墓を訪ふ

明治三十七年の秋、米國ニューヨーク市に於て我輩は森村市左工門君に會したが、談緒は忽ち鐵膽の上に及び、互ひに追憶談を繰り返えした、我輩は森村君に向ひ、之れから歐洲に渡る積りですが、西北利亞線を取て歸るか、印度洋線を取るかは、未だ決定して居りません、若し印度洋に出でましたならば、必ず新嘉坡に於て鐵膽の墓

に參詣する積りですと言ふと、森村君は白髯を掀しながら、ドウカ是非ソウしてやツて下さむと言はれた

それから英佛諸國に赴き、遂に印度洋線を取て歸朝するに決したが、明治三十七年は其の道中に暮れ、紅海に於て新年を迎へ、我輩を載せたる英國汽船バラロング號がアラツカ海峽に入つたのは實に一月下旬で有つた、

コロムボを立ち出て、より一週間、此の翠色滴らんばかりの海峽に入つた時は、如何にも嬉れしかつた、特に新嘉坡の市街が見えた時に、我輩は我が舊友阿川鐵膽が我輩を待ち居る様な心地で、一種言ふ可らざるの感慨が起つた、朝の八時頃上陸して三井物産會社領事館等を歴訪し、午後ヅキクトリア街の中野病院を訪ふた、折柄院長中野光三君は患者往診中で、不在で有つたが暫らく待つ内に歸て來た書面の上では舊知で有るが、面會は初めてで有る、我輩曰く

實は阿川が病死の時の情況をも伺ひ、又其の墓に參詣したいと思ひまして、其の御案内を願ひたいと思ふて參つたのです

時に窓外には電光閃き、大雨沛然として降て居た、中野君曰く

此の雨が晴れたら、墓地へ御同伴致します、墓地はスラングーンと云て、此の市街

から凡そ六英里ばかり離れて居ります

彼れは雨の晴れるを待つ間鐵膽の病狀に付て、詳かに語り出した

阿川君が暹羅から當地へ着きました時は、病氣は最早やヒドくなつて居たので、私は之を一診して、残念ながら仕方がないと嘆息しました、それから日を逐ふて段々悪くなるばかりで有りましたから、私は斷然阿川君に向て宣告をしました、モウ之れは到底助からぬから、其の覺悟をし玉へ、遺言が有るなら今の内に聽て置かう、又生前に何か望むことが有るなら言ひ玉へ、力の及ぶ限りの事はするからと申しました平生から豪膽なる阿川君の事ですから、此の宣告をしましても、ソウかと言つて、顔色少しも變らず、別に落膽の様子もなく、誠に立派な大丈夫の覺悟で有りました

語る中野君も涙を以て之を語つたが、聽く我輩も落涙せざるを得なかつた、窓外の雨は未だ止まない、中野君は語を次て曰く

死の宣告を受けてからでも、尙元氣旺盛で天下の大勢を論じて居りました、食事は段々進まなくなつても、刺身を肴にしてウキスキイばかりを飲んで居ました、それから死ぬる前日に、思ひ出した様に、濱縮緬の大巾の帯を占めて見たいと言

ひ出しましたので、市中を探かして之を整へて占めさせましたら、大に喜んで居ました

話の内に雨は全く晴れた、熱帯地方の雨は、大雷雨が來ても直ちにサツと晴れて、日本の五月雨の様にピシヨ〜と續くことはない、全く鐵膽の喜びさうな天候だ、雨が晴れたから、イザ墓地へ案内せんと、中野君は立ち上がった、二頭曳きの馬車に同乗して、走ること二時間、スラングーンの日本人共同墓地へ着いた、

墓地は風景の良い所で、翠色滴らんばかりに種々の熱帯植物が繁茂して居る、愛らしい草花の間の小逕を進むこと十數歩にして、鐵膽の墓の有る所へ出でた、剛氣なる彼れも今や古るい一木の主人となつて居る、其の近所には海軍の軍人や郵船會社の船員を始め、此地で死んだ人が、少からず埋まつて居る、其中で最も多いのは醜業婦で有て、鐵膽などは前後左右悉く美人で圍まれて居る、土人は箒を取て、鐵膽の墓の周圍を掃いた、我等は墓前に水を注ぎ花を供へて一禮した、中野君は土人に銀貨を與へて、彼方の椰子の樹に在る大きな果實を兩三個叩き落させ、其の果實を割て、其中から出づる水を茶碗に注ぎ、それへ携へて來たウキスキイを入れつゝ曰く

世界の水の中で純の純なる者は、此の椰子の實の中に在る水です、阿川君は好ん

で之をウキスキイに割て飲みましたから、之を供へましよう。一杯を鐵膽の墓前へ供へ、我等も亦其の前で之を飲んだ。中野君曰く、君と僕とコウして來て、ウキスキイを供へてやるのですから、鐵膽は嘸喜んで居りましよう。

中野君は更らに鐵膽の茶碗へウキスキイを注いで、生ける者に物言ふ如く、嬉れしだらう、一杯飲み玉へ」と言つたが、此時覺えず兩人で泣いた。暫らく此のあたりを逍遙して居る内、中野君は多くの墓を指し、一々墓の主人に付て語つた。何れも生前に彼れの厄介となつた者だ、鐵膽と數歩の所に在つた一墳を指して「之れは今西恒太郎と云ふ男です」と言つた。今西と云へば我輩の舊友で、鐵膽も一面の識は有る男だ、彼れが倫敦に於て大患に罹り、歸途印度洋に於て死んだと云ふ事は聞て居たが、此の新嘉坡に埋まつて居るとは、實に意外で有つた。彼れも亦中野君の手に久しく世話になつて、遂に此地に骨を埋めて居るのだ、我輩曰く、

今西が居れば鐵膽も話相手が在て宜しからう、彼れの墓前へも、一杯のウキスキイを注いで、名残りは盡きねど、其晩三井からの招宴に遅刻してはならずと、馬車に乗つた。而して馬車の中で、不圖思ひ出したのは、鐵

膽の墓の事で有る。唯土が高くなつて、其上に一本の木が在るばかりだ、其の木も既に半分以上腐さつて居る。我輩はドウか石塔位は立て、やりたい者だと、中野君と相談すると、新嘉坡には漢字を良く彫刻する工人がないので、其儘になつて居ると云ふ話だ。それに市街を距る六英里の所に在るのだから、石の運搬にも、中々金がかかる。と云ふ話で有つたから、それでは舊友の間から寄附金を募つて、石塔は我輩が作つて日本から送り、土臺石と周圍の石垣は中野君に於て作ると云ふ事になつて、此の相談は馬車の中で纏まつた。

墓碑

日本へ歸てから早速我輩は鐵膽の墓を作つた。其の表面には鐵膽阿川太良の六字を刻した。之れは彼れ自身の書いた文字を寫真板で引き延ばして、大きく彫り附けたので、其裏面には我輩が簡單に彼れの經歷を書いた。其文に曰く、

鐵膽阿川太良、日本長州志士也。夙抱經世器量、注意東洋形勢。明治二十六年、孤劍颯然游清國、北轅南舵、跡遍禹域。次年慨然入暹羅國、磐谷府、日清戰役後、創立暹南商會、拮据經營、實爲日暹貿易之先驅。明治三十三年春、探檢馬來半島、偶獲病。此年七月三

十日歿於新嘉坡客舍享年三十七銘曰

鵬程夢里 圖南先驅 嗚呼鐵膽 日東丈夫

明治三十九年七月

石川半山誌

此の石碑を建つるが爲めに磐谷府の有志者からも寄附金が來たが、森村市左衛門
高山長幸吉富簡一の諸氏からも寄附金が有つた、かくて多くの親友の同情に依て
出來上がった石碑は新嘉坡へ送られ、中野君其他有志家の盡力で立派にメラシ
ーンの墓地へ建てられ、我が忘る可らざる親友阿川鐵膽は、長しへに此の石碑の下
に眠て居る

友人阿川鐵膽終

明治四十三年六月二十日印刷
明治四十三年六月廿三日發行

定價金貳圓

編者

東京市牛込區市ヶ谷本村町九番地

石川安次郎

發行者

東京市牛込區市ヶ谷本村町九番地

平井茂一

印刷者

東京市神田區三崎町三丁目一番地

小西幸吉

印刷所

東京市神田區三崎町三丁目一番地

日本印刷株式會社

不許複製

中華民國三十三年六月二十二日

國民政府

令

財政部

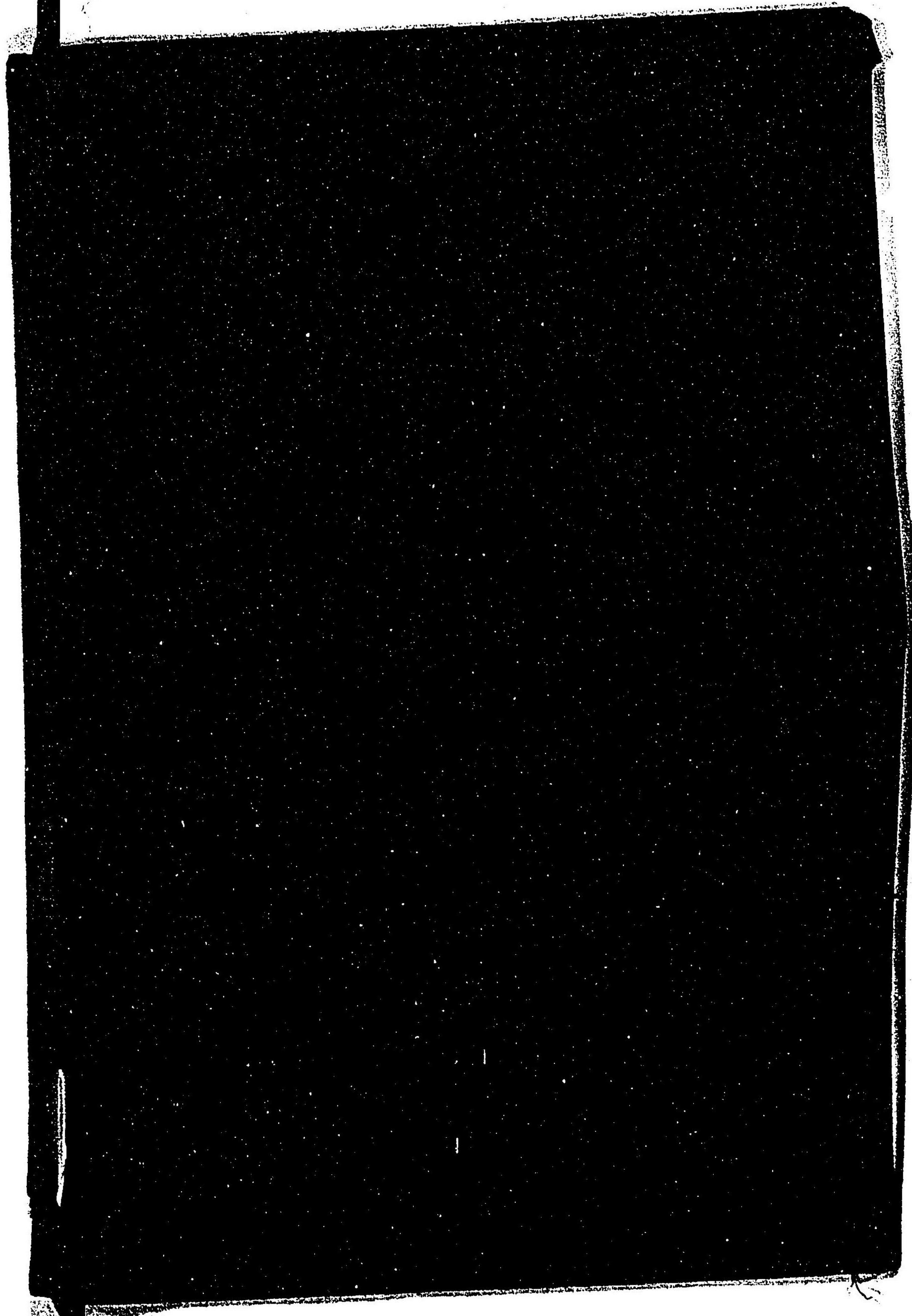
呈

財政部

呈請 財政部 呈請 財政部

財政部

265
253



026363-000-6

特20-986

鉄胆遺稿

石川 安次郎 (半山) / 編

M43

ADD-0013



